

連載 思春期に発病が多い **統合失調症**

第2回 統合失調症の症状

東京大学医学部精神医学教室 教授 笠井 清登

【ポイント】

- * 幻聴や妄想などの症状（陽性症状）が特徴的
- * 周囲には理解しづらい生活の支障を抱える人が多い
- * 病識が得られにくいいため、治療につながりにくいことがある
- * 思春期・青年期には典型的な症状がそろわないことも多い
- * 症状を理解しつつ、本人の苦悩や悩みに寄り添う姿勢が大切

統合失調症には様々な症状があり、全ての方に同じ症状がみられるわけではなく、その全体を理解するのが難しいのが特徴です。今回は、①幻覚・妄想、②生活の支障、③病識の3つにまとめてみます。

幻覚・妄想

幻覚と妄想は、統合失調症の代表的な症状です。不思議な症状に思えますが、ほかの精神疾患だけでなく脳疾患（例えば脳炎）や全身性疾患（例えば内分泌疾患）でも認めることがありますので、脳の働きの誤作動によるものであることがわかります。この誤作動を元に戻すことが、幻覚や妄想の治療になります（治療については、次回の第3回で詳述）。

統合失調症の幻覚や妄想には一定の特徴があります。幻覚や妄想などをまとめて「陽性症状」と呼ぶことがあります。

幻覚とは、実際にはないものが感覚として感じられることをいいます。統合失調症で最も多いのは、聴覚についての幻覚、つまり幻

聴で、誰もいないのに人の声が聞こえてくる、ほかの音に混じって声が聞こえてくる、という幻聴（幻声）です。「バカめ」などと本人を批判・批評する内容、「死ね」などと命令する内容、「ドアを開けました」などと本人の行動を注釈しているような内容が代表的です。普通の声のように耳に聞こえて、実際の声と区別できない場合や、直接頭の中に聞こえたり、声そのものははっきりしないのに不思議と内容ばかりがピンとわかったりする場合などがあります。幻聴に聞き入ってニヤニヤと笑ったり（空笑）、幻聴との対話でブツブツ言ったりする（独語）場合があるため、周囲の人から奇妙だと思われるしまい、その苦しさを理解してもらいにくいことがあります。

妄想とは、明らかに誤った内容のことを信じてしまい、周りが訂正しようとしてもその訂正を受け入れられない考えのことです。「悪い組織から攻撃されている」（迫害妄想）、「近所の人をせき払いは自分への警告だ」（関係妄想）、「隣の人から見られている」（注察妄想）、「何者かに尾行されている」（追跡妄想）などの内容が代表的で、これらをまとめて被害妄想と呼びます。ときに「超能力を手に入れた」といった誇大妄想が出現することもあります。

妄想に近い症状として、「考えていることが声となって聞こえてくる」（考想化声）、「自分の意思に反して誰かに考えや体を操られてしまう」（作為体験）、「自分の考えが世界中に知れわたっている」（考想伝播）のように、自分の考えや行動に関する症状があります。

思考や行動について、自分が行っているという感覚が損なわれてしまうことがこうした症状の背景にあると考えられることから、自我障害と呼びます。

統合失調症の幻覚や妄想の多くは、「他人が自分に対して悪い働きかけをしてくる」という内容です。つまり人間関係がテーマになっています。その内容は、大切に考えていること、劣等感を抱いていることなど、本人の価値感や関心と関連していることが多いようです。このように幻覚や妄想の内容は、もともとは患者さん本人の気持ちや考えに由来するものです。また、幻覚や妄想の多くは、本人にとっては真実のことと体験され、不安で恐ろしい気分を引き起こします。無視したり、放っておいたりすることができず、否応なくその世界に引きずり込まれるように感じます。場合によっては、幻聴や妄想に従って行動を起こしてしまうこともあります。「本当の声ではない、正しい考えではない」と説明されてもなかなか信じられせん。

生活の支障

統合失調症では、日常生活や社会生活の中で適切な会話や行動や作業をすることが難しくなることも特徴的です。陰性症状とも呼ばれますが、幻覚や妄想に比べて病気による症状とはわかりにくい症状です。本人も説明しにくい症状ですので、周囲の人から「社会性がない」、「常識がない」、「気配りに欠ける」、「怠けている」などと誤解されることがあります。こうした日常生活や社会生活の支障は、次のように分けて考えると理解しやすいでしょう。

1. 会話や行動

会話や行動のまとまりがなくなることがあります。日常生活では、話のピントがずれる、話題が飛ぶ、相手の話のポイントや考えがつかめない、作業のミスが多い、行動の能率が悪いなどの形で認められます。症状が極端に強くなると、会話や行動のまとまりがなく

なっているように見えることもあります。こうした症状は、注意を適切に働かせながら会話や行動を目標に向けてまとめあげていく、という知的な働きが影響を受けることによると考えられます。

2. 感情

物事に適切な感情がわきにくい、感情をうまく表せずに表情が乏しく硬い、それなのに不安や緊張が強く慣れにくい、などの感情に関わる症状がみられます。また、他人の感情についての理解が苦手になり、相手の気持ちに気づかなかつたり、誤解したりすることが増えます。こうした感情の症状のために、対人関係において自分を理解してもらったり、相手と気持ちの交流を持ったりすることが苦手となります。

3. 意欲

仕事や勉強をしようとする意欲が出ずにゴロゴロばかりしてしまう（無為）、部屋が乱雑でも整理整頓する気になれない、入浴や洗面などの身の清潔にも構わない、というように生活の仕方に症状が表れます。さらに対人関係についての意欲の症状として、他人と交流を持とうとする意欲、会話をしようとする意欲が乏しくなり、無口で閉じこもった生活となる場合もあります（自閉）。

派手な陽性症状が改善しても、このような生活上の支障を抱える人が少なくないということも、統合失調症を持つ人の苦悩をよりよく理解するために大切です。

病識

「病識」というのは、自分自身が病気であること、あるいは幻覚や妄想のような症状が病気による症状であることに自分で気づくことができること、認識できることをいいます。統合失調症の場合には、この病識が影響を受けます。多くの場合、普段の調子ではない感じや、神経が過敏になっていることは自覚できます。しかし幻覚や妄想が活発な時期には、

(12ページに続く)

(5ページの
続き→)

それが病気の症状であるといわれても、なかなかそうは思えません。症状が強い場合には、自分が病気であることが認識できない場合もあります。治療が進んで病状が改善すると、自分の症状について認識できる部分が増えていきます。ほかの患者さんの症状については、それが病気の症状であることを認識できますから、判断能力そのものの問題ではないことがわかります。自分自身を他人の立場から見直して、自分の誤りを正していくという機能が影響を受けることが背景にあると考えられます。

周りの人が情報共有を

以上のような症状の特徴を理解し、本人の

抱える苦悩に寄り添いながら対話することが、癒やしにつながります。また、そのような症状を抱える中であるからこそ、人生や生活上の一般的な悩みに対してのサポートもまた重要になります。幻覚や妄想が始まってからできるだけ早く治療を開始すると経過が良いのですが、思春期・青年期に一時的に似た体験をするものの、統合失調症へは発展しない方も少なくありません。ただ、悩みは続くことが多いので、いきなり医療機関の受診を考えないまでも、周りの人が情報を共有するように心掛けて、症状が強い場合にはスクールカウンセラーや精神科医と連携するなど、サポートを行うことが大切です。

(※謝辞) この原稿の執筆にあたっては、福田正人先生(群馬大学)、金原明子先生(東京大学)、熊倉陽介先生(東京大学)の多大なご協力をいただきました。